

一人の確かな国語力をとらえる評価の設定(2)

「おおむね満足できる状況」を理解する

― 二学年構成から見た読むことを中心にした評価 ―

青山学院大学 岩崎 保
いわさき たもち

二「読むこと」の評価について

最も授業時間数の多い「読むこと」の評価では、読解力と想像力、読書力の学習状況を見ていく。「読むこと」は、さまざまな情報を受信するための基礎作りを目指すものであり、指導事項の内容に沿って評価内容を設定している。

ここでは、文学教材と説明文教材について、「基本単元」と「複合単元」学習したことを生かしてを取り上げてその評価例を示した。また、他領域との関連についても述べている。

(1) 一年生は 文字習得から文章を正しく読むことに進む段階を細かく評価したい。

①「うたに あわせて あいうえお」(四月) 初めて文字を読む学習の評価例

【読／書】言葉のまとまりで区切って、はっきりと声に出して読んでいる。

音声言語を五十音の文字言語に置き換えて「語句」とし、その意味を「読んで認識する」初めての学習である

る。声に出して歌うように読み、理解できる喜びを実感している児童の姿を見つめている。

②「いろいろな くちばし」(六月) 初めて説明文を読み「問題」と「答え」を読み分ける評価例

【読】問いかけの文と答えの文が分かり、それぞれの部分に書かれている事柄を読み取って理解している。

【読／書】主述の関係や文のつながりを理解して、はっきり音読している。

「くちばし」の説明の順序や内容を考えながら、主述と述語を意識してクイズを解くように音読できる姿である。「問題文」の意味を理解し、「答え文」の内容に興味をもって読めることを目指している。

③「おむすび ころりん」(七月) 初めて長文の昔話を工夫して音読を楽しむ評価例

【読】登場人物の様子や場面の情景を想像して、友達に話したり音読や動作で表現したりしている。

【読】昔話の語り口調をつかみ、はやし言葉などのリズムを楽しみながら工夫して音読している。

はやし言葉を生き生きと歌い、おむすびの行方とねずみのお礼の豪華さに歓声を上げて音読し、友達とのびのびと動作化している児童が見えると思う。おじいさんとねずみたちが会話する情景を想像しながら、いっしょになって手をたたいて音読を楽しむ姿を見たい。

④「ちがいを かんがえて よもう／どつぶつの 赤ちゃん」(二月) 説明文を読むことと書くことを関連させた評価例

【読】ライオンの赤ちゃんと、しまつまの赤ちゃんの違うところを文章の中から見つけ、大事な語句を読み取っている。

【書】動物の赤ちゃんについて絵本や図鑑から紹介することを集め、語と語や文と文との続き方に注意して書いている。

【言】主語と述語の関係に注意しながら、文章を読んだり書いたりしている。

主述の関係をとらえることを「読む」「書く」学習の共通課題としている。ライオンとしまつまの「赤ちゃん」の違いを読み取り、他の動物の赤ちゃんにも関心を広める。そのうえで、絵本や図鑑を探して読み、主

述を適切に使い分けて「どつぶつの赤ちゃんカード」を作る学習の評価である。

(2) 二年生は、複合的な学習の中で、身に付けた力が生かされているかを評価したい。

①「二じゅんじよに 気をつけて よもう／たんぼの ちえ」(五月) 説明文の条件をつかむ評価例

【読】たんぼの花と軸の変化とそのわけを、順序を追って整理しながら読んでいる。

【読】「たんぼの何が」「どういう様子」なのかに気がついたり、「それは、――からです。」など理由の記述に注目したりなど、内容が分かかって音読している。

【書】見つけたたんぼについて、教科書の説明と比べたり、気づいたことをまとめたりして友達に分かるように書いている。

植物の生長の時間的な順序や様子を知り、それぞれに理由のあることを理解することが中心となる。また、説明文の内容に適合するように明確な音読ができることも目指したい。その後、自分でたんぼを見つけて観察し、実物で確かめて友達と共感する評価でもある。

②「四 本と 友だちに なるう／スイミー」(六・七月) 読むことのレベルアップを図る評価例

【読】場面ごとの様子やそのときのスイミーと赤い魚たち

の気持ち想像し、感想をもちながら読んでいます。

【読】 好きな場面を選び、言葉のまとまりや文の内容、言葉の響きなどを考えて声に出して読んでいます。

【読】 おもしろそうな本を探して読み、友達に紹介する本を選んでいきます。

【書】 友達に紹介する本について、紹介に必要な項目を落とさずに順序よく並べ、紹介カードを書いている。

読む力は、背景の様子と登場人物の行動や心情を対比しながら想像し、感想を適切にもつことが中心となる。

また、その感想と適合するように「背景・人物」に思いを込めた音読ができることである。さらに、発展読書の継続と読書カードの日常的な活用を意図している。

③「六 お話を楽しもう／スーホの白い馬」(三月) 低学年のまとめとしての物語文の評価例

【読】 物語の流れが大体わかり、スーホや白い馬の気持ち、情景を想像しながら、挿絵の手がかりに物語を読んでいく。

【読】 自分が好きになった場面を、読み取ったことをもとに、登場人物になりきって音読している。

【読・書】 自分が読んでおもしろかった本を選び、友達に分かるように必要な事柄を整えて、順序よく紹介している。

物語の展開に合わせて、スーホと白い馬の苦闘を想

「二 段落のつながりに気をつけて読もう／『かむ』ことの本」

【読】 中心文を見つけて各段落ごとの内容を読み取っている。

【読】 段落と段落がつながって大きなまとまりとなることを理解している。

【読・書】 書きだしと結びなど、段落やまとまりには、全体の中での役割があることを理解している。

段落の中心となる文が見つけられ、段落と段落がつながって「大きな意味のまとまり」となり、そのまとまりが文章全体の中でそれぞれに役割をもっていることを理解する。段落意識の定着と読書への活用を期待したい。

② 文学基本単元(十月)で想像する力を高める評価例

「一 場面の様子をそうぞうしながら読もう／ちいちゃんのかげおくり」

【読】 四つの場面のつながりを理解し、言葉や表現に着目して、それぞれの場面の様子を想像しながら読んでいく。

【読】 自分がいちばん心を打たれた場面を、表現されている様子がよくわかるように意識しながら、声に出して読んでいく。

【読】 選んだ場面や音読のしかたの違いから、友達と自分との感じ方や考え方の違いに気づいている。

像して感想をメモしながら、長文を自分の国語力で読み通すことを目指している。そして、好きな場面を選んで、感想の気持ちが出る音読を工夫できるようにしたい。また、おもしろかった物語を選び、作者・題名・主人公・あら筋・感想などを順序よく紹介し、自信をもたせる評価である。

(3) 中学年は、三年では基本的理解を、四年では定着と活用を見たい。

① 説明文基本単元(五月)で「段落」と「文章構成」理解の評価例

「二 まとまりに気をつけて読もう／ありの行列」

【読】 「問い」「答え」の内容と書かれている段落を理解している。

【読】 「問い」と「答え」に挟まれて説明の部分があり、全体が「初め・中・終わり」で構成されていることを理解している。

【読】 どんな実験・観察・研究を、どんな順序でしたかをノートにまとめている。

【書】 「段落」を指摘したり数を確認したりしている。「説明のまとまり」を「段落」として理解し、その順序をノートにまとめて段落の数を確かめたりして、段落の形を初めて理解する基本的な学習の評価である。

初めの影送りから最後の影送りまでの場面ごとのちいちゃん的心情と背景を想像する。その中から最も感動した場面を選んで、登場人物の気持ちが出るように工夫した音読ができ、友達の音読との違いに気づく評価である。

「一 場面をくらべて読もう／一つの花」

【読】 場面の移り変わりを理解し、そのときの様子や、父・母の気持ちを想像しながら読んでいく。

【読】 題名「一つの花」について自分の考えをもつて話している。

さまざま読み物で想像する楽しを経験してきたが、ここでは「父・母」の気持ちも想像できる児童の心の成長をつかみたい。また、題名の意味を考え、題名の大切さに気づき、本の選択眼を育てたい。

③ 一年間の学習をまとめる教材(三月)の評価例

「学習したことを生かして／モチモチの本」

【話・書】 自分の考えをもち、友達に聞こえる音量と速さと言葉遣いで話している。

【読】 場面の様子が分かるように声に出して読んでいく。

【読】 発表する内容を意識して、叙述に即し丁寧に文章を読んでいる。

【書】 伝えたいことが相手に分かるように文章を書いている。

物語の読み取りは児童を信じ、学習発表会で自分が考えた課題を文章にまとめて、友達や父母に向かってしっかりと話ができる自信をもたせたい評価である。

「学習したことを生かして／ごんぎつね」

【話・題】自分の感想や意見を友達と交流しようとして話している。

【読】書かれている情景や登場人物の心情を、言葉に着目して読んでいる。

【読】場面の様子や登場人物の心情がよく分かるように声に出して読んでいる。

【読】物語を読んだ感想をまとめ、友達と比べて考えたり書いたりしている。

【書】伝える相手を意識して発表内容が分かるように文章を書いている。

物語を読解し、考えたことや想像したことを個人やグループで発表する準備をして、児童の一人一人が確実に学習発表会で発表できることが評価の中心となる。そのために、場面の様子や登場人物の心情を想像した感想メモを作り、それを生かした音読の工夫と発表原稿を書くプロセスを確かめる評価をしている。

四年

(4) 高学年の「読むこと」の評価例は、物語を読み味わうこと、自分の意見を発信することの単元で五年と六年の評価を比較する。

① 文学基本単元（十月）で物語文を読み深め、味わう評価例

「一 人物の考え方や生き方をとらえよう／わらぐつの中の神様・方言と共通語」

【読】登場人物の人物や場面の様子、情景を叙述に即して想像し、味わいながら読んでいる。

【読】現在↓過去↓現在という物語の構成の効果を理解しながら、マサエの気持ちの変容を読み取っている。

【書】方言と共通語の違いを理解し、それぞれのよさを感じ取っている。

六年

「一 表現を味わい、豊かに想像しよう／やまなし」
【読】場面ごとに出来事や描写を読み取りながら、比喩表現など優れた言葉の使い方を味わい、「五月」と「十二月」のイメージを対比して考えている。
【書】比喩的表現の効果や擬声語・擬態語を理解し、情景を想像している。

高学年の読解は、物語の構成の工夫や展開のおもしろさに着目させている。そのおもしろさは、巧みな表現方

法にあるが、五年では方言が人物の人物を効果的に表し、六年生では比喩的表現の効果や擬声語・擬態語が物語の緊迫感を表している。それぞれの文章表現の味わいに気づき、登場人物の心情を考え、場面の情景描写とつなげて想像して読み味わうことを評価したい。

② 情報活用単元（十二月）で多様な情報について、収集から発信までのプロセスを理解する評価例

「二 目的に応じた伝え方を考えよう／①ニュース番組作りの現場から ②工夫して発信しよう／編集して伝える」

【読】テレビ放送のニュース番組の「特集」の作り方を理解し、過程ごとに整理してまとめている。

【読】いい報道をするために、取材のしかたや放送原稿の書き方について学ぶことは何かを考えて読んでいる。

【書】発信するためのいい話題を考えて話し合い、分担・協力して材料を集めている。

【書】教材文から学んだ編集や発信の方法を生かし、材料を選んだり配列を考えたり、また写真や図表との関係も考えたりして、原稿を書いている。

【話・題】伝えたいことが正確に伝わるように話している。

六年

「二 筆者の考えを受け止め、自分の考えを伝えよう／①平和のとりでを築く ②自分の考えを発信しよう／インターネットと学習」

【読】教材文を読んで筆者の考えと事例をとらえ、写真への感想を語り、自分の意見や感想をもっている。

【書】自分の課題に応じて、必要な図書資料やインターネットなどから情報を集め、要旨を固めながら材料を選んでいる。

【書】集めた情報の中から必要なものを選択し、自分の考えに取り入れて、自分の意見が伝わるように組み立てを考えて書いている。

【書】具体的事例と意見、反対意見とそれに対する反論などを、読み手に分かるように書き分けている。

情報処理能力を扱う初めての単元であり、五年では「放送番組」企画のしかた、六年では「平和」についてインターネットを活用した意見の収集と発信を行う。どちらも、教材文を読み取って情報通信の仕組みに関心をもち、積極的に発信する意欲を支援するための評価である。機器の整備と教師のアドバイスが必要となる。

五年

五年